

企業家と虚業家

Distinguishing Entrepreneurs from “*Kyogyoka*”, Non-Entrepreneurs, Risk Lovers and Adventurers

小川 功 (Isao Ogawa)

滋賀大学

1. はじめに

現在、ライブドアによるニッポン放送株取得を巡る議論が当事者のフジテレビを除くマスコミ報道のヘッドラインを占め、主人公の堀江貴文氏に対する毀誉褒貶も賛否両論が対立する形で展開されている。堀江氏を誹謗する報道の一例を挙げると、「テレビが宣伝する虚業家の株買い占め」¹⁾、『「虚業家」の正体見たり『ホリエモン』』²⁾といった具合である。ここに挙げた報道では堀江氏への評語として「虚業家」という古風なる用語が共通して使用され、「ポッと出のIT長者」³⁾、「ITの鎧を纏った虚業」⁴⁾といった表現も含まれる点に注目したい。

「虚業」に関しては水沼知一氏によれば「虚業」は明治前期には『「実業」の反対概念としてかなり広く通用』⁵⁾したとされ、国家的事業と位置付けられた「実業」に対し「虚業」は『「私」的利害のみを専ら関心事とする』⁶⁾と捉えられる。この説に従えば「公益の追求者・渋沢栄一」⁷⁾などと、専ら「私益」を計る虚業家とを判別することになる。藤田貞一郎氏は「明治十年代に経済概念としての生命を終え、经营理念として純粹転化した国益が、大正期には政治的言辞の色濃い国策」⁸⁾になったと解される。

背景にある経済思想により企業家と虚業家とを判別するとの水沼説は、渋沢栄一自身も当時において国益的事业とそれ以外との判別は困難

だと断じた⁹⁾のと同様に無理があり、筆者としてはむしろリスク選好度・リスク管理能力の如何に求めるべきではないかと考えている。

その後、岩田龍子氏は主に昭和期の関係文献を利用して『虚業の研究』を刊行、「虚業」に関する唯一に近い単行本の研究書となっている。しかし「会社屋」という用語を使った論文としては菅野和太郎氏の「会社屋」¹⁰⁾という短編があるほか、「虚業家」、「会社屋」等という用語そのものに関して遡及して検討した研究や文献は乏しい。筆者は既に北浜銀行頭取岩下清周の「虚業家」的性向等¹¹⁾について論じたが、本稿¹²⁾は「実業家」「企業家」の反意語として使用される「虚業家」を、類義語・周辺語¹³⁾と考えられる「会社屋」「総会屋」「成金」等とともに、まず明治大正期を中心に（戦中、戦後は省略）当時使用された用語例を調査してみようと着手したものである。最終的には本フォーラムの目的である「企業家」研究に何らかの書誌学的な示唆¹⁴⁾を得ようとするものであるが、もとより今回実際に参照できた文献（巻末の文献リスト参照）は投資リスク関連分野の単行本などごく限られた範囲にとどまり、涉猟の程度は極めて不完全な点をお断りせねばならない。

2. 「虚業家」の類義語

(1) 「山師」「策士」

「山師」という用語は古くから「金掘師」とと

もに鉱山採掘等の専門家の意味で使用され、高い専門知識の故に近世には特権的な優遇措置を得ていたとされる。¹⁵⁾しかし鉱山業者の中には石井千太郎のように「新鉱区を手に入れて、之を売飛ばせば屹度金が儲かる」¹⁶⁾と鉱区売に徹するものもいたため、「抑々我が邦に於ては古来鉱山は危険の事業と為し、之に関係する者は山師と称せらる」¹⁷⁾など、ニュアンスの変化が生じた。¹⁸⁾

しかしその後になって特定の職域から遊離した概念として使用され、例えば明治24年7月外山脩造が商業興信所設立の趣旨を銀行業界で説明した際にも「其事業が山師風にして単に集金の目的に出づる場合」¹⁹⁾には商業興信所の調査が有効だと説明している。また『商業資料』は「大阪には貯財家多く、東京には山師多し」²⁰⁾、「白昼洋服を着けたる泥棒の徘徊するは東京の特色なり。されば東京の紳士と云ふもの其真贋を見分けざれば飛だ迷惑を蒙むる事あり」²¹⁾と東西財界の気風を比較している。『銀行事故調・全』は「鉱山業ヲ管メル取締役…カ行金ヲ流用シテ失敗」²²⁾、「頭取所有ノ夕張炭山ノ爆発」²³⁾との風説で取付に遭遇した芸予銀行、第八十五銀行や、「代表者八田徳三郎個人ノ事業タル小屋瀬炭鉱事業不振ノ為メ同業ニ貸出シタル…三十万円回収」²⁴⁾不能となった八田貯蓄銀行など現実に鉱山投資に関係した不良銀行のほか、中外貯金銀行専務を明治43年の知事報告に基き「山師的人物ニシテ…世評甚タ宜シカラサル人物」²⁵⁾と判断している。『兜町繁昌記』の著者・岡本鶴園も慶応卒の仲買人の福岡福平を「自己思惑の手張りなどは薬にしたくも行らず、頗る堅実な行方、所謂徒らに虚栄を張る山師的ではなく、真摯な営業振り」²⁶⁾と評している。こうした用例から「山師風」「山師的」には①集金目的、②思惑を行い、③徒らに虚栄を張る、④不堅実で真摯でない営業という語感が含まれるようである。さらに策略に長けた「策士」等の類語と併用される場合も少なくない。²⁷⁾

高橋是清ほどの人物でも一時期「南米秘露に

赴き、銅山事業に手を出して一山当てんとした」²⁸⁾との経歴の故に「動もすれば山師的人物の如く見ら」²⁹⁾れて、高橋自身をも「世間からの信用も害し」³⁰⁾たと嘆かせ、日銀入りの際には横やりを入れられただけでなく、後年大臣の座にあった時にも野党から古傷を攻撃された。

「豪胆にして俠気を有し他人の避けて進まざる方面へ猛進する風あり」³¹⁾と評された北浜銀行の岩下清周が狐塚鉱山等にも融資した事実に対して山本検事は「〈岩下〉被告は常にこの種の事業に手を出して莫大の行金を支出し…みだりにかかる価値なきものを担保として投機事業に放資するは、多年銀行家としての経験あるものなすべき事ならんや」³²⁾との論告を行った。山口銀行の坂野兼通は北浜銀行の主宰者「〈岩下〉翁は銀行家として実に意表外に出る放胆な人であった。是と信じた事業には、何等顧慮する處なく、無遠慮に投資すると云った、悪く云へば山師、善く云へば大事業家」³³⁾だとして岩下を「放胆な人」「山師」と評している。岩下を石井定七とともに「関西財界に於ける二大山師」³⁴⁾と見做す者もいた。

(2) 「相場師」とその類語（「帳合師」「思惑師」「投機師」など）

価格変動リスクに敢然と挑戦する者は古来「相場師」等と呼ばれ、特別視されることが少なくなかった。『現代金権史』の著者・山路愛山は明治41年「相場師気質」³⁵⁾を次のように解説する。「此気質の最も悪しきものに至っては始めより事業の性質に頓着せず、唯株を売って逃げ除かんが為めに株式会社を起し、権利株を売放して跡は野となれ山となれ、我等は唯だ金さへ儲ければ善しと云ふが如きものあり。道德の上より裁判すれば是れ恰も一種の詐欺取財漢に異ならざれども…成功したる紳士なりとて、天下挙て其才気を称賛するのみ」³⁶⁾で「斯様なる詐欺師も世間を憚らず大きな面をして居るぞかし」³⁷⁾と非難している。

『商機』の著者・野城久吉は「相場をするものを称して、悉皆相場師と云へば、夫れ迄だが、

大相場師には、理財家でなくてはなれぬ³⁸⁾として「現在素露盤玉に乗らぬ代物でも、将来よくなると思へば、拾って置³⁹⁾く故渡辺治右衛門、前川太郎兵衛らを「大相場師」と呼んでいる。

山路愛山から「事業家としての正当の骨折よりも寧ろ専ら株式市場の掛引に重きを置きしのみ⁴⁰⁾と酷評された甲州財閥の兩宮敬次郎自身は「他人から見れば冒険的のやうだが、其は一旦決心がついた後の事を見るからで、決心するまでには非常に心配し、非常に危険を感じる⁴¹⁾タイプだとして、「世の中の人私は私が株を有って居るから相場師と思って居る。然かし私は相場はして居らぬ事業家であるから、相場が高くならうが廉くならうが関係しない…相場師の心持と事業家心持とは黒白の違ひだ⁴²⁾と、買占めを含む大口投資を敢行しつつも「相場師」説を全面否認した。

また「仲買人より其身を起した⁴³⁾ため、「世人は直ちに相場好きの人物⁴⁴⁾と解し、井上保次郎とともに「わが国株成金の蒿矢⁴⁵⁾とも評された今村清之助も「仲買人たるを好まずして、終に其仲間を脱⁴⁶⁾して今村銀行を創設した。今村の伝記は「決して一攫千金の利を得むと欲する、所謂投機的の人物ならざりし⁴⁷⁾点を強調している。大株仲買人で後年に株界を去り別府観光開発の先駆者と称えられた油屋熊八⁴⁸⁾も「唯だ私利の爲めに故なき機会を造り出さんとし、所謂相場師として社会の軽蔑を受くるが如きは、仲買人たるものの本分を尽すものにあらず⁴⁹⁾と主張し、東株仲買人の前田仁平も「昔は仲買人といふと一口に相場師とか詐欺師とかのやうに侮って、ややもすると蛇蝎のやうに嫌はれたもの⁵⁰⁾と回顧している。現実に役員が相場等に関与して問題を起した銀行としても役員が「共謀シ行金ヲ私シ自行株ヲ買取シテ奇利ヲ恣ニセン⁵¹⁾とした筑摩銀行、取締役が「米穀取引ニ失敗シ又銀行所有債券…ヲ無断売却⁵²⁾した夷隅銀行、行主が「株式売買ニ失敗シ財政紊乱⁵³⁾した大柏銀行、頭取が「米相場にて十数万円の損失⁵⁴⁾を出した水橋銀行など無数に存在する。

このように相場師の称を嫌う者が多い中で、異色の存在が「田附將軍」田附政次郎である。田附も世間から「幸運に恵まれた一個の大相場師のやうに考へ⁵⁵⁾られたが、「一向平気⁵⁶⁾で終生真の相場師たることを自負し実践した。還暦を迎え伊藤忠兵衛から相場から足を洗っては…と忠告された田附は「自分のやる投機なるものは、自分が経済人として世に処する信念であり…一刻も停止せぬ物価の公正なる標準と流動をつくる為にも自分の行動は誠に貴重な存在である⁵⁷⁾と返答して、「投機は立派なる実業であり、総ゆる商売は結局は投機⁵⁸⁾なりとの相場道の哲学を常に説いていたという。

神戸の米株仲買人・藤井忠兵衛は明治42年ころには「成敗常なきは畢竟僕等相場師の茶飯事⁵⁹⁾として相場師を自認したが、大正元年には自己の編書の序で一転して、「一般仲買人界を目して往時の所謂帳合師、相場師と同視せられんとするものあるは吾人の常に遺憾措く能はざる所⁶⁰⁾として差金を目的とする「相場師」「帳合師」と「仲買人」の峻別を唱えた。これは大正元年7月31日北浜堂島仲買事件の予審決定書の中で川上定次郎判事が江戸時代の堂島の定期米売買の「帳合相場は…直段の昂低したる差金のみの授受を目的になし居りしものなれば全く賭博たるに外ならず…市場に出入するものを相場師、帳合師と称し賭博者と同視し来り居り⁶¹⁾として、相場師=賭博者という史観を展開したからであった。前述の「山師」に対する当時の偏見に共通する根深いものが感じられる。⁶²⁾

こうした史観に依拠して川上判事は監督緩慢の故に「現時の取引所が…殆んど帳合相場当時の状態を現出⁶³⁾、「定期取引を投機以外の賭博と化し了せしめ、世人をして取引所を公の賭博場と称せしむるに至り⁶⁴⁾などとする藤井から見れば「一般仲買人を指摘して不信背徳の不正業者と論断⁶⁵⁾する予想外の予審決定を行ったため、藤井はかかる「苛酷なる官憲の圧迫⁶⁶⁾を世に問うべく予審決定書を翻刻・公刊したのである。

「相場師」と類似の「思惑師」に関して『商業資料』は「戦争に臨んで小事に屈せず、豪胆無類大々的の取引をなす」⁶⁷⁾島徳次郎を「俗に云ふ思惑師」⁶⁸⁾とする。野城久吉も明治34年に阿部彦太郎を「思惑師中でも立派な思惑師である…相場師に最も必要なる自信力に富み…」⁶⁹⁾と評しているが、諸戸清六に対しても「諸戸の特に常人と異なった処は、思惑師で相場師でない」と云ふ点である。彼の志は、確に遠大にあって、目先きのことに余り頓着せぬ⁷⁰⁾とする。目先きの利益を追う「相場師」でなく、遠大な長期投資を「思惑師」と区別すると解される。大正11年に小川市太郎（大阪毎日新聞記者）は「土地の思惑師等が空手で、想像も及ばない莫大の利益をせしめる…最近欧州戦争後、我国に起った土地会社の濫興は、明かに此の事実を証明して居る…投機が急に郊外の地価を煽り、煽られた地価は又他に影響して、他愛もなく無暗と地価を騰貴せしめる。二、三年前我国に於て土地熱の旺になるや、土地の思惑師等は都会付近の其処此処で、農地を買取っては土地会社を組織し、買った値段の何層倍かで之を会社に売付けてその差額を利すると共に、会社は又株式の現物団と新聞の広告を利用して、土地の利益を誇大に吹聴した為に、その前までは坪十銭にも値しない荒蕪地で、一躍三十円乃至五十円にも奔騰せしものの少くないことは、世人の記憶に新なる所である。…財界が反動期に入るや、土地株は著く暴落した。当時五、六十円を唱へた土地株にして、今日十銭にも値しないものが尠くない。ノミならず此等の土地会社に於ては、株主が第二回の払込を恐れて無代の譲受人を探かしても譲受人がないと云ふやうな状態」⁷¹⁾と土地会社と「土地の思惑師」との関係を指摘した。そして小川は「従来のやうに富豪や投機師等が、大都市の周囲に於て、土地を独占することが不可能になる」⁷²⁾ように公益的住宅の促進を主張した。

(3) 「総会屋」とその類語（「会社荒し」「総会荒し」「会社ゴロ」「活劇党」など）

小林健男氏は「戦前も総会屋はいた。しかし、その数は非常に少なく、問題にする程もなかった」⁷³⁾と解するが、すこし違和感を感じる。大正8年『株式会社の裏面』の著者・池島民理は「総会屋とは自己も少数の株式を所有して会社の株主と為り、甘言を以て同志株主を糾合し其多数の力を藉りて株主総会に重役を迫窮威嚇するを表面の目的とし、其実総会前に於て重役を自分の意の儘に行動せしむることを期する連中」⁷⁴⁾とし、「活劇党一名総会屋」⁷⁵⁾と呼んでいる。池島によれば「活劇党の前身は会社荒し…会社ゴロとも謂ふ」⁷⁶⁾とし、「株主でもなく、会社内部の秘密欠陥をほじり出し、之を種に重役をゆすめることを商売とする」⁷⁷⁾が、「最近に至って次第に発展し、所謂（又は総会屋）と為った」⁷⁸⁾との説を述べる。「会社荒し」の例としては新橋銀行経営者の「子分中ニハ銀行会社荒シノ壮士の人物アリ」⁷⁹⁾とされたり、東京の須永某、大阪の鶴海某など、「会社荒しの一群を陰に使用して…鶴海の徒、唯々として將軍の一令下に動く、而して其参謀長たるもの」⁸⁰⁾が守山又三⁸¹⁾といわれた。

(4) 「会社屋」とその類語

「会社屋」には「会社製造屋」「発起屋」「発起業者」「事業屋」など数多くの類語があるが、いずれも「虚業家」にかなり近い語感を有している。まず「会社製造者」について神戸正雄は日露戦後「特ニ世上会社製造者ナルモノアリテ特ニ鉦山熱、土地熱、工業熱ノ旺盛ナル時ニ於テ巧妙ナル誘惑的手段ヲ弄スルコトアリ。最モ注意ヲ要スル所ナリ」⁸²⁾「其放資ヨリ大所得ヲ挙クル必要アルカ如キ…放資家ニシテ間々其資本ヲ増加セントシテ、投機ヲ試ムルノ誘惑ニ罹リ易キモ、此ハ慎マサルヘカラス」⁸³⁾と投資家に注意を喚起した。月刊雑誌『投資研究』を主宰する投資研究社代表・家村五郎は「本邦会社屋発達史」との題目を立て、「日清戦後は未だ何と云っても会社の発生時代であったから会社の数も尠く、従って会社屋と真面目な事業者との区別も判然としなかったが、日露戦後の財界勃興

時代には純真の事業家と会社屋との区別がハッキリ区別される如くなり、一般からも職業的発起人を指して『会社屋』と称する如くなった⁸⁴⁾「日露戦後の大変動に因て、夥しく所謂知識階級の、相当な失業者が滅切り殖へた。此の内の一部のもが今迄の地位を逆用的に、会社屋へ転替し…四十三年頃にも、本職的乃至は内職的の会社屋の数は益々増加した⁸⁵⁾と会社屋の成立を説いている。しかし日清戦後の「会社屋」という用語例としては明治29年に「ワシヤ今度会社屋を始めたから、何でも発起人の集ることがあったら、報らせて下さい。銀行設立発起請込処。どんな会社へでも這入ります⁸⁶⁾という「大坂第三流以下の紳士⁸⁷⁾が広告するのを受けて「大坂第一流以上の紳士⁸⁸⁾が「株券の申込ハ一切御断申上候⁸⁹⁾と、会社屋を毛嫌いしている笑話がある。この笑話から①「会社屋」という最新の用語がまだ実用化、定着化せず、笑話としての使用にとどまっている。②「会社屋」の主たる活躍領域が「発起人の集ること」にあり、③その事業内容が「銀行設立発起請込処」であり、④特色は「どんな会社へでも這入ります」という、低水準の発起引受にあった、⑤一流紳士に弊害が及びつつあったことが判明する。おそらくこのころに「流行語」として「会社屋」という用語が誕生したものと推測される。

池島民理は「発起屋一名会社製造屋と謂ふのは、会社を設立することのみを商売とし、設立後は一向会社に関係の無い連中を指す⁹⁰⁾とし、安田与四郎も「会社創立を仕事にしてをる人にとって、株式は転売を目的として作られる商品である⁹¹⁾とする。

大正バブル期に「泡沫会社製造の天才⁹²⁾といわれたのが「稀代の吸血漢高柳淳之助⁹³⁾、「陋劣卑劣の詐欺漢松島肇⁹⁴⁾などであった。彼らの商法は「調査もせず、新聞広告を見て儲かりさうな新会社の株式募集に乗って喜⁹⁵⁾ぶ地方人から「棚から牡丹餅式の甘言尽しを並べて、シコタマ吸ひ取った⁹⁶⁾のであった。

(5) 「成金」

野城久吉は明治39～40年の熱狂相場の記述の中で「成金党連が買対って、増資運動を試みて、遂に三百円まで煽り上げた⁹⁷⁾鐘紡株が40年以後の反動で「暴落に次ぐに、暴落を以てし。成金筋の漸次歩に返る⁹⁸⁾様子を描いている。そして「深山の熟柿と掛けて、成金殿の御家と解く、心は人知らず果は皆つぶるる⁹⁹⁾という当時の諺も紹介するなど、「成金」という用語が当時広く流行語となりつつあった様子が伺える。賀田金三郎も明治40年ころ「成金」に関して「俄に金を儲けると大抵の人は慢心する、虚栄にアコがれる、滔々たる成金党の失敗する所以は多く此に在り…ボロを掩はんとして益々飾る¹⁰⁰⁾と語った。

その後、大戦景気による「成金」としては「新富豪物語¹⁰¹⁾では「新富豪」を特に定義していないが、記者自身が「新富豪物語」を書き来って殆どそれが大部分船舶長者の列伝のやうな観がある¹⁰²⁾とし、その理由を「無資産階級から一躍して巨富を積んだ者を出したのは船舶業者が最も多数¹⁰³⁾としている。掲載の83名中、3名の代表的人物として「新富豪中の巨頭にして時局の生み出した驚く可き成功者の随一¹⁰⁴⁾の山下亀三郎、「朝鮮の山に虎を狩¹⁰⁵⁾った虎大尽・山本唯三郎は3回連載、内田信也は2回連載されている。

世間で成金の代表格の一人と目された山本唯三郎自身は「成金」を定義して、「殆んど何等の勤労もせず、計画もなく、一朝にして奇利を僥倖し、一寒児より忽ち暴富者となったもの¹⁰⁶⁾とした上で「努力奮闘」して来た「予は決して世間の所謂『成金』でない¹⁰⁷⁾と猛然と抗議した。そして「俺は成金ではない、こんなに努力したのだぞといふことを知らせる為だ¹⁰⁸⁾との名目で有名な朝鮮半島での虎退治を挙行した。「一日に十里十五里の山中を駆ける…健脚がなければなりませぬ…体力の訓練をしなければ…虎さへも打取り得ぬぞと云ふ教訓¹⁰⁹⁾を垂れるべく、持論たる力行主義の見本として示したが、かえって世の失笑を買う結果となった。

『中野金次郎伝』の著者の村田弘は「山本〈唯三郎〉は投機的な才能を持ち、株の売買をやって相場師としても有名だったが、前進することは知っていても退くことを知らず、用兵を誤って、遂に没落、泡沫の如く消え去ってしまった。湯水の如く金をつかい、新橋、赤坂など狭斜の巷における大尽振いも、いまは昔の語り草だが、日本虚業家列伝でも編纂されるようなことがあれば、彼など、さしずめその第一ページを飾る存在」¹¹⁰⁾と評している。

成金と題する書籍・雑誌の刊行も相次いだ。多くは成金にあやかった利殖勧誘の手引書であった。帝国殖産興業奨励会の秋元安は大正10年9月1日『利殖雑誌・成金』を創刊した。主幹の佐瀬文哉は「本誌成金之解」で「成金とは近代の物質的成功者に対する代名詞であって、従来使はれたる成功よりは遥かに狭義の意味の熟語である」¹¹¹⁾と定義し、「本誌は実際の経済上の優勝者たらんとして一新人士の誤れる嘲笑に反し、斯かる誌名を命じた」¹¹²⁾と創刊の意義を強調したが、成金と同様にほどなく廃刊に追い込まれた。

成金自身による自伝としては「実に相場師の変遷ほど急劇なものはない」¹¹³⁾と回顧した千原伊之吉『成金物語』がある。千原自身は「巨額の負債と、信用の全く零であった境涯から、一躍百二十万円を儲けた」¹¹⁴⁾として、「当時関西に於ては一つの奇蹟の如く持て囃され」¹¹⁵⁾、「半ケ年の日子に、三百円の資本から百二十万円を勝ち得たことは…予想外であると共に、従来相場界のレコード破りであると喧伝された」¹¹⁶⁾と回顧する。そして「自分が成金当時は自分の家には毎日会社の発起人になって貰ひたいとか、或は鉱山を買へとか、地所を買って貰ひたいと…来る人々が引きも切らぬ有様」¹¹⁷⁾であったのに、「一朝蹉跌する時は…侮蔑の眼を以て視ら」¹¹⁸⁾れ、「北浜市場に於て全勝將軍として謳歌はれた身が、再び元の朦朧相場師となって成金の末路を語」¹¹⁹⁾っている。

3. 「虚業家」

(1) 「虚業家」

「虚業家」は『広辞苑』では「実務を行わず、ただ権利譲渡などを目的とする名義だけの会社をみだりに起して実業家を気取る者」、小学館『日本国語大辞典』では「実務を行なわないで、ただ権利譲渡などを目的とする名目だけの会社をやたらと設立する者や、相場のような好不況に左右されやすい、場あたりの堅実でない事業をする者。また、ある種の不堅実な実業家を皮肉っていう語」¹²⁰⁾と解説されている。

鳥谷部春汀は『続明治人物評論』の中で住友の広瀬幸平が明治12年に五代友厚等と組んで米買占めに対抗して勝利した後、「投機的事業の危険にして且つ無益の虚業たるを自覚し、爾後復た決して相場に従事したることなかりし」¹²¹⁾と米穀取引に「虚業」を使用している。また小説家の内田魯庵も遊興に走る「虚業家」と癒着関係にある銀行頭取との間の尺牘（手紙）のやりとりという形式で、かれらの不堅実な生態を風刺した小説「虚業家尺牘数則」を明治35年に発表した。¹²²⁾これより先、明治29年には曲水亭流觴も『商業資料』に「満身皆胆ともいふべき程の豪胆」¹²³⁾で「甲処乙処の鉄道株を二束三文の安値にてグングンと無暗矢鱈に買ひ占め」¹²⁴⁾る「株式王」なる短編を発表するなど、文芸作品にも「虚業家」の人物が登場し始めた。

神戸正雄は明治44年「小放資家ノ第一ノ放資ハ…間々虚偽銀行ニ貯蓄シテ全損失ヲ見ル」¹²⁵⁾と、「虚偽銀行」という言葉を使うが、当時は「大抵東京に本店を有せる」「怪しき貯金銀行」が「沢山の募集員を使ひ盛んに預金を勧誘し」、「預り金は資産も何もない内輪のものへドシドシ融通」¹²⁶⁾する悪弊が横行した。こうした「虚偽銀行」の典型として同系統の「鉱山業者移民会社…冒険的事業家…失敗事業家及政治家中有名ナル借金家」¹²⁷⁾などへの「債権ノ全部ハ殆ント取立ノ見込ナク、従テ銀行ノ業務ハ全ク休止ノ状態」¹²⁸⁾に陥った京浜銀行などをあげるこ

とができよう。

鵜崎鷺城は明治45年『朝野の五大閥』の中で、特に「実業家か虚業家か」という項目で安田善次郎、神田鐳蔵と、「恰も虚業家の標本の如く唄はるるの久しき」¹²⁹⁾福沢桃介の3名を取り上げ、安田は「地道の商売に依て富を致せしの疑ふべからざるも、其反面に於ては大思惑師としての大なる成功者たるを忘るべからず…其思慮周密にして胆大なる、恐らく今の実業家中比肩すべき者なからん」¹³⁰⁾として、「実業家か虚業家か」判断不定と解した。安田の「放資振りには余程感心」¹³¹⁾した岩下清周も「機会ある毎に、時とする随分放胆に金を貸出す善次郎翁の態度を褒め」¹³²⁾たといわれる。

「一攫千金を夢み、堅実なる事業経営に力を尽くさない」¹³³⁾「虚業経営の横行」¹³⁴⁾を嘆いた高橋亀吉は「虚業的断面」¹³⁵⁾の一例として「社金を流用して…自社の株式投機をやる…結果が損失となれば之を会社の負担に荷はし、幸ひ利益を得れば一部乃至全部を重役が着服する」¹³⁶⁾合同毛織の防戦買を挙げた。また家村五郎は「会社将来の悲況を予知して巧みに策を弄して売逃げをする様な虚業家が尠くない」¹³⁷⁾という意味で「虚業家」を使用している。

(2) 「虚業家」等と形容された人物の共通性

類似、近似語としての「会社屋」を含めて、人物評価上、「虚業家」という形容詞が使用された人物は管見の限りでは、既述の人物を中心に安田善次郎、雨宮敬次郎、松本重太郎、神田鐳蔵、福沢桃介、平沼専蔵、磯村音介ら日糖旧重役、山本唯三郎、高倉為三、荒井泰治、渡辺勝三郎、藤本清兵衛、島徳蔵など、少なくとも十数名は存在する。

研究者による評価としては菅野和太郎氏は島徳蔵を「会社屋」¹³⁸⁾と規定した上で、「彼は多くの会社を発起した際に、少からぬ不正行為をなしたかも知れないが、同時に彼の活動が、延いて会社企業心及び株式会社知識を世人に扶殖したことは、何人も否定し得ない」¹³⁹⁾として「彼の功罪は相半す」¹⁴⁰⁾と断じた。近年の論文でも

たとえば三島康雄氏は同じ島徳蔵を、「真似ることのできない一種の天才的な才能を持って…怪腕を揮って大阪財界を引ずり回し、株式界の王者として君臨した一代の梟雄であり、不世出の虚業家」¹⁴¹⁾と評した。

彼らには「此種の人物の常として」¹⁴²⁾、「虚業家通有」¹⁴³⁾の資質があったとの指摘もあるので、彼ら「虚業家」等への評語をある程度集約して、その共通性を探ることで、企業家と似て非なる「虚業家」像の明確化に向けて本稿のまとめとしたい。(以下は原則として出典のみ巻末文献リスト番号で表示)

① 虚飾性と集約できそうな性向

評語の例としては「経営ぶりも華美」¹⁴⁵⁾、「派手」³⁷⁾で「湯水の如く金をつかい…大尺振り」³⁷⁾、「押出しと軒に掲げた看板だけは立派」²⁰⁾、「真面目な創立者達の風を装って」²⁰⁾、「仮面を被れる」³²⁾、「八百屋店の雑業家」⁴⁷⁾、「仮りに重役達の名義にしてある株式」²⁰⁾「所謂抱き株」²⁰⁾を多用など

② 売抜けなどモラルの欠落傾向

評語は「社会道徳の観念薄き」⁹⁾、「悪事を悪事として考へて来なかった…良心の麻痺」⁴⁹⁾、「少からぬ不正行為をなした」⁴⁵⁾、「悪辣と陰険と詐謀と術策とで殆んど固められて居る」⁴⁷⁾、「転売を目的」²⁸⁾、「売逃げ」³⁰⁾、「利益を得れば…着服」³¹⁾、「会社を作ってはよく逃げる」⁴⁸⁾、「ボロ鉞区を寄せ集めて泡沫会社を創立し、自分の鉞区を会社の株券と引換て、直に金にしてしまふ」²⁰⁾、「現物出資で、二束三文の荒蕪地や鉞山…を高価に見積って売抜けるなどは虚業家の常套手段」³²⁾、「自分の名義を出し、責任を負はねばならぬ株などは…お先へ利益を失敬しておくのが、虚業家の手腕」³²⁾など

③ リスク管理能力の欠如

「随分放胆に金を貸出す」³³⁾、「繊細な注意力を欠いた」⁴⁹⁾、「泡沫の事業、杜撰なる事業計画」³²⁾を「ろくに検討もしないで」³⁷⁾、「注意したが、有頂天になって…聴き入れない」³⁷⁾など。ただし「思慮周密にして胆大

なる」^[9]安田は例外的存在であろう。

④ 「策士」的要素が大

「巧妙ナル誘惑的手段ヲ弄スル」^[8]、「策を弄して」^[30]、「其内より配当金を生み出す手品の種」^[15]として「仮出金」勘定を乱用、「自己の才気を恃みて縦横無尽に切回し、時に策を弄し」^[9]、「縦横の策を弄して其株券の下落を防」^[15]ぐやり口、「虚名を以て世を欺き、それにて世を渡る」^[15]、「いかさま物」^[15]

⑤ 「相場師」的要素が大

「投機的な才能を持ち…相場師としても有名」^[37]、「一攫千金を夢み」^[31]、「濡手で粟をつかんでやろうとの野心に燃え立」^[37]った「ヤマッ気が多い勝負師」^[37]、「前進することは知っていても退くことを知らず」^[37]、「公然相場師として世間の之を認め、自らも亦銘を打てる者」^[9]

⑥ 誇大妄想傾向

「一人多職主義のサンプル」^[27]、「大仕掛にて虚声を釣り、此虚声を以て世を欺き、上手に世を渡らんとした」^[15]、「徹頭徹尾法螺」^[9]、「怪傑」^[9]

⑦ 破綻の蓋然性が高い「成金」性

「まぐれ当りに当たった時でもない限りまづ百分の九十九までは、儂い末路を遂げるのが定命」^[20]、「遂に没落、泡沫の如く消え去って」^[37]、「当然斯うなるべき人」^[49]

最後に、冒頭に掲げた現今の「IT長者」が単なる「IT成金」で終るのか、「今様天一坊」として虚名を千載に残すのか否かは甚だ興味深い問題ではあるが、現時点では彼らが上記のような性向を顕在化することなく、伝統的な「虚業家」的経営者の轍を踏まずに、もっぱら企業家の王道を歩んでいただきたいとの希望を述べて筆を擱く。

1)3) 平成17年2月22日『日刊ゲンダイ』

2)4) 平成17年2月24日『週刊新潮』

5) 水沼, 昭和44年, p165

6) 水沼, 昭和44年, p179

7) 渋沢研究会, 平成11年, p397

- 8) 藤田, 平成10年, p377
- 9) 藤田貞一郎氏は『青淵百話 乾』から「国家的事業だ、国益的の興業だと云へば、天下何事業として然らざるは無い」(藤田, 平成10年, p316)との渋沢栄一自身の言葉を引用する。
- 10) 菅野, 1931年[45]
- 11) 小川, 2003年[54]
- 12) 本稿は滋賀大学リスク研究センターの金融リスク等に関する共同研究プロジェクトの中のリスク・テーカー研究成果の一部である。関係各位のご支援に謝意を表したい。
- 13) 類義語・周辺語としては、ほかにも「政商」「買占屋」等多数あるが、既に先行研究の蓄積のある分野として本稿では省略した。
- 14) 企業家研究フォーラムの全国大会において加護野忠男氏らによって「総会屋」等の成立時期についての問題提起がなされたことがあり、本稿もこうした経営学と経営史学の双方の領域にまたがる議論の一層の深化の契機になればと考える。
- 15) 上野・三上, 大正7年, p85
- 16) 朝比奈, 明治42年, p286
- 17) 明治38年12月9日『東京経済雑誌』
- 18) 石井千太郎はその後「鉱山業は決して山師仕事でない」(朝比奈, 明治42年, p288)と自覚したと語っている。塩島仁吉は八溝金山株の暴落事件について、「世人をして八溝金山は山師の設立したる泡沫会社の如き感を発せしめ、株主に驚愕を与へた」(明治38年12月9日『東京経済雑誌』)と論じている。八溝金山は小川, 2005年[58]参照。
- 19) 武内, 昭和3年, p88
- 20) 明治27年4月10日『商業資料』
- 21) 明治27年5月10日『商業資料』
- 22) 大蔵省, 1976年[51], p56
- 23) 大蔵省, 1976年[51], p153
- 24) 大蔵省, 1976年[51], p95
- 25) 大蔵省, 1976年[51], p13
- 26) 岡本, 明治45年, p232
- 27) 例えば日糖事件に連座した代議士の臼井哲夫は「策士か、説客か、豪傑か、山師か、悪党か殆ど方物すべからざる人物として…常に大言壮語自家を広告し、世間を煙に捲き、如何にも豪傑らしく如何にも策士らしく装ひたり」(三木, 大正2年, p282~3)と評された。なお「策士」という類語は、「天下の策士」(越山堂, 大正14年, p102) 小泉策太郎, 奥繁三郎ら政界筋の人物の形容詞として多用されるようだが、大河内輝剛(歌舞伎座)は「(日露)戦後泡沫会社の沢山出来たときには無暗に(発起人兼任の)盲目判を捺した

ものだ…其時分策士連の本城は二三の待合に極まってゐた。夕方でも往って見ると何やら凝議してゐる。そこへ座り込むと幾らかになった」(朝比奈, 明治42年, p217)と泡沫会社のプロモーター連中に対して使用している。

- 28)29) 鷗崎, 明治45年, p342~3
- 30) 朝比奈, 明治42年, p14
- 31) 阿部, 大正11年, p225
- 32) 大正5年10月20日『大阪毎日新聞』。なお小川, 2003年[54]参照。
- 33) 坂野兼通の追懐(岩下, 昭和6年, p191)
- 34) 越山堂, 大正14年, p152
- 35) 「相場師気質」の顕著な人物を列举すると, 岡本鷗園は東株仲買人の松村辰次郎(松辰)を「客の物は少しも遣らないで自分の物を遣る丈」の「仲買でなくして純然たる相場師で…氏の相場は蓄財の爲めでも, 生活の爲めでもない…実に相場の爲めに相場をして居るので, 強めて言へば嗜好の爲めに相場をして居る」(岡本, 明治45年, p190)と評している。同様に松谷元三郎自身も「ソンなに失敗しても尚ほ相場は磨められない。由来私は相場其ものに大なる興趣を有って居る…乾坤一擲の快拳であるから, 勝ても負けても愉快で堪らない」(朝比奈, 明治42年, p295)と自己分析し, また鉦山業を本業とした野村半三郎自身も「鉦山に手を出した動機は全く山が好きだと云ふ事です」(1932年[46](52)大正7年3月26日『時事新報』)と記者に語っている。
- 36)37) 山路, 明治41年, p200
- 38)39) 野城, 明治43年, p67
- 40) 山路, 大正3年, p65
- 41) 雨宮, 明治40年, p392
- 42) 雨宮, 明治40年, p396
- 43)44)46)47) 足立, 明治39年, p554~5
- 45) 越山堂, 大正14年, p48
- 48) 小川, 2004年[55]参照。
- 49) 明治27年9月10日『商業資料』
- 50) 報知, 昭和7年, p23
- 51) 大蔵省, 1976年[51], p37
- 52) 大蔵省, 1976年[51], p97
- 53) 大蔵省, 1976年[51], p155
- 54) 阿部, 大正11年, p228
- 55)58) 伊藤, 昭和10年, p188
- 56) 伊藤, 昭和10年, p3
- 57) 伊藤, 昭和10年, p230
- 59) 朝比奈, 明治42年, p324
- 60) 藤井, 大正元年, 序 p1
- 61) 藤井, 大正元年, p9~10
- 62) 川上判事だけでなく法学博士の戸田海市も「仲買人相互に真面目の取引を行ふことを得ずし

て, 自然に其取引は昔時の帳合米又は近時の『チキ』と称せられしものの如く, 一種の空売買に墮落するの危険甚だ大なり」(藤井, 大正元年, p172)として帳合, 「チキ」取引の空売買性を強調した。

- 63) 藤井, 大正元年, p15
- 64) 藤井, 大正元年, p13
- 65) 藤井, 大正元年, p128
- 66) 藤井, 大正元年, 序p2
- 67)68) 明治28年11月10日『商業資料』
- 69) 野城, 明治43年, 卷末p45
- 70) 野城, 明治43年, 卷末p68
- 71) 小川, 大正11年, p248。この種の土地会社のプロモーターは「安値に土地を買収し, 土地の実価以上に之を評価して会社に引継ぎ, 其間の利鞘は新株券に化して発起人賛成人に於て所得せるもの尠くない」(T11. 2. 6大朝)と批判された。
- 72) 小川, 大正11年, p399
- 73) 小林, 昭和42年, p13
- 74)75)76)77) 池島, 大正8年, p38~9。「総会荒し」の用例も見られる。(「総会荒し」大正11年2月5日『東京経済雑誌』)
- 78) 池島, 大正8年, p40
- 79) 大蔵省, 1976年[51], p22
- 80) 三木, 大正2年, p231
- 81) 守山又三については小川, 2002年[53]参照。
- 82) 神戸, 明治44年, p172。こうした例として東西銀行頭取は満韓起業等へ大口貸出をするなど, 「真面目ナル人物ニアラス猥りに投機的事業ニ関係」(大蔵省, 1976年[51], p23)する性癖が顕著で, 同行取締役も「同臭一味ノモノ」(同上)として明治43年大蔵省に報告された。
- 83) 神戸, 明治44年, p130
- 84) 家村, 昭和5年, p94
- 85) 家村, 昭和5年, p98
- 86)87)88)89) 明治29年1月10日『商業資料』
- 90) 池島, 大正8年, p1
- 91) 安田, 昭和2年, p12
- 92) 大浜, 大正15年, p82
- 93) 大浜, 大正15年, p115。高柳淳之助は小川, 2004年[56], 小川, 2004年[57]参照。
- 94) 大浜, 大正15年, p110。松島肇は小川, 2005年[59]及び予定稿を準備中。
- 95)96) 「地方人を食った事業屋」大正9年2月20日『東京経済雑誌』
- 97) 野城, 明治43年, p858
- 98)99) 野城, 明治43年, p875
- 100) 朝比奈, 明治42年, p189
- 101) 大正7年1月24日~5月10日『時事新報』88回連載

- 102)103) 1932年[46](69)大正7年4月16日『時事新報』
- 104) 1932年[46](61)大正7年4月6日『時事新報』
- 105) 1932年[46](78)大正7年4月26日『時事新報』
- 106)107) 山本唯三郎「成金か成金か予は之に対して抗議を申込む」『実業之日本』大正6年10月15日、p70
- 108) 越山堂、大正14年、p129
- 109) 山本、大正7年、序
- 110) 村田、昭和32年、p89
- 111)112) 大正10年9月1日『利殖雑誌・成金』創刊号、p2
- 113)119) 千原、大正5年、p231~2
- 114)115)116) 千原、大正5年、p141
- 117) 千原、大正5年、p233~4
- 118) 千原、大正5年、p120
- 120) 『広辞苑 第五版』平成7年、p706、『日本国語大辞典』第六卷、昭和53年、p220
- 121) 鳥谷部、明治33年、p143
- 122) 岩田、昭和62年、p170 以下
- 123) 明治29年2月10日『商業資料』
- 124) 明治29年3月10日『商業資料』
- 125) 神戸、明治44年、p141
- 126) 明治43年10月13日『保険銀行時報』
- 127)128) 大蔵省、1976年[51]、p26。京浜銀行頭取の岡部廣は小川、2002年[52]参照。
- 129)139)142) 鶴崎、明治45年、p358
- 130) 鶴崎、明治45年、p355~6
- 131) 132) 岩下、昭和6年、p117
- 133)134)135)136) 高橋、昭和5年、p76
- 137) 家村、昭和5年、p55
- 138)139)140) 菅野、1931年[45]
- 141) 三島、1965年[50]、p22、41
- 143) 大正11年12月2日『大阪朝日新聞』
- [9] 鶴崎鷲城(熊吉)『人物評論朝野の五大閥』東亜堂書房、明治45年
- [10] 岡本鶴園『兜町繁昌記』壬子出版社、明治45年
- [11] 沢本江南『人の今昔』開成社書店、大正元年
- [12] 藤井忠兵衛編『北浜堂島仲買事件予審決定書』藤井忠兵衛、大正元年
- [13] 内田魯庵『社会百面相』岩波書店、大正2年
- [14] 三木幾太郎編『疑問の人』東京毎夕新聞社、大正2年
- [15] 山路愛山『現代富豪論』中央書院、大正3年
- [16] 千原伊之吉『成金物語』采女社、大正5年
- [17] 『征虎記』山本唯三郎、大正7年
- [18] 上野景明・三上徳三郎『本邦鉱業と金融』丸善、大正7年
- [19] 池島民理『株式会社の裏面』精禾堂、大正8年
- [20] 秋元宏『銀行や会社の破綻を予知するには』大京堂書店、大正9年
- [21] 阿部直躬『三十年之回顧』商業興信所、大正11年
- [22] 小川市太郎『住宅及土地問題』大阪毎日新聞社、大正11年
- [23] 遠藤楼外楼『銀行罪惡史』日本評論社出版部、大正11年
- [24] 矢野文雄『安田善次郎伝』安田保善社、大正14年
- [25] 越山堂編『明治大正成金没落史』『経済パンフレット』第2輯、越山堂、大正14年
- [26] 大浜孤舟著『暗黒面の社会・百鬼横行』新興社、大正15年
- [27] 時事新報社経済部編『財づる物語』東洋経済新報社、大正15年
- [28] 安田与四郎『株式市場の裏表』大日本雄弁会、昭和2年
- [29] 武内義雄『輕雲外山翁伝』商業興信所、昭和3年
- [30] 家村五郎『投資之研究』投資研究社、昭和5年
- [31] 高橋亀吉『株式会社亡国論』万里閣書房、昭和5年
- [32] 奥村千太郎『株式放資と売買術』文雅堂、昭和6年
- [33] 小林一三ほか『岩下清周伝』故岩下清周君伝記編纂会、昭和6年
- [34] 報知新聞経済部編『相場実話』千倉書房、昭和7年
- [35] 伊藤悌造『田附政次郎伝』田附商店、昭和10年
- [36] 南波礼吉『株界生活六十年』河出書房、昭和28年
- [37] 村田弘『中野金次郎伝』東洋書館、昭和32年
- [38] 小林健男『乗取屋・買占屋・総会屋』三一書房、昭和42年
- [39] 水沼知一『「実業」と「虚業」』『近代日本経済思想史1』有斐閣、昭和44年
- [40] 岩田龍子『虚業の研究』日本経済新聞社、昭和62年

【引用・参考文献リスト】

(A) 単行本(発行順、主に史料として利用する便宜上、年号で表示)

- [1] 鳥谷部春汀『続明治人物評論』博文館、明治33年
- [2] 野城久吉『投機新論』私家版、明治34年
- [3] 足立栗園『今村清之助君事歴』小谷松次郎、明治39年
- [4] 雨宮敬次郎述『過去六十年事蹟』桜内幸雄、明治40年
- [5] 山路愛山『現代金権史』服部書店、明治41年
- [6] 朝比奈知泉『財界名士失敗談 上巻』毎夕新聞社、明治42年
- [7] 野城久吉『商機』民友社出版部、明治43年
- [8] 神戸正雄『近代放資論 完』有斐閣、明治44年

- [41] 神田豊晴『総会屋100年』リッチ・マインド，平成3年
- [42] 藤田貞一郎『国益思想の系譜と展開』清文堂出版，平成10年
- [43] 渋沢研究会編『公益の追求者・渋沢栄一』山川出版会，平成11年
- [44] 小川 功『企業破綻と金融破綻—負の連鎖とリスク増幅のメカニズム—』九州大学出版会，平成14年
- (B) 論文，雑誌ほか(単行本との区別上，西暦で表示)
- [45] 菅野和太郎「会社屋」『経済史研究』経済史研究会，1931年6月
- [46] 「新富豪物語」1932年1月24日～5月10日『時事新報』88回連載
- [47] 「当世実業家気質」1934年7月20日『東京経済雑誌』
- [48] 「問題の人島徳蔵氏」1934年9月5日『東京経済雑誌』
- [49] 「高倉為三」1936年12月2日『大阪朝日新聞』
- [50] 三島康雄「島徳蔵と日魯漁業株式会社」『漁業経済研究』13巻4号，1965年4月
- [51] 大蔵省『銀行事故調・全』(渋谷隆一監修復刻解題)，駒沢大学『経済学論集』第6巻臨時号，1976年3月
- [52] 小川 功「生保破綻と“虚業家”による収奪—九州生命詐欺破産事件と河村隆実のリスク選好—」『滋賀大学経済学部研究年報』第9巻，2002年12月
- [53] 小川 功「“虚業家” 守山又三のハイ・リスク行動と京都財界」『京都学園大学経済学部論集』第12巻第2号，2002年12月，
- [54] 小川 功「『企業家』と『虚業家』の境界—岩下清周のリスク選好度を例として—」『彦根論叢』第342号，2003年6月
- [55] 小川 功「湯布院・別府の観光開発の先駆者・小野駿一と油屋熊八」『滋賀大学産業共同研究センター報』第2号，2003年6月
- [56] 小川 功「“虚業家” 集団『高柳王国』の形成と崩壊—大衆資金のハイ・リスク分野への誘導と収奪—」『彦根論叢』第351号，2004年11月
- [57] 小川 功「“虚業家” 高柳淳之助による似非・企業再生ファンドの挫折—ハイ・リスクの池上電気鉄道への大衆資金誘導システムを中心に—」『滋賀大学経済学部研究年報』第11巻，2004年12月
- [58] 小川 功「証券業者による鉱山経営とリスク管理—八溝金山事件を中心として—」『彦根論叢』第354号，2005年5月
- [59] 小川 功「“虚業家” 松島肇の軌跡—昌栄銀行を中心として—」地方金融史研究会報告，2005年9月(予)